

(8) アルコール・インターロック装置使用後のアンケート調査結果

約6ヶ月間、私有車にアルコール・インターロック装置を取り付けた、B群14名およびC群16名に対して、アルコール・インターロック装置を取り外した後に、使用後のアンケート調査を実施した。調査方法は、アンケート調査票(参考資料)を郵送し、全員から回答が得られた。なお、全アンケート結果については、参考資料として掲載することとし、ここでは、後の部分に係る部分のみを掲載することとした。

1) Q2: お酒の飲み方の変化に対して、装置を使用していることは影響しましたか

「影響した」「やや影響した」の合計は、B群が43%、C群が25%であり、「運転する前日の飲酒を控えた」との回答が多い。一方で、呼気アルコール濃度が基準値以上であればエンジンを始動できないため、飲酒量は変わらないとの回答もある。

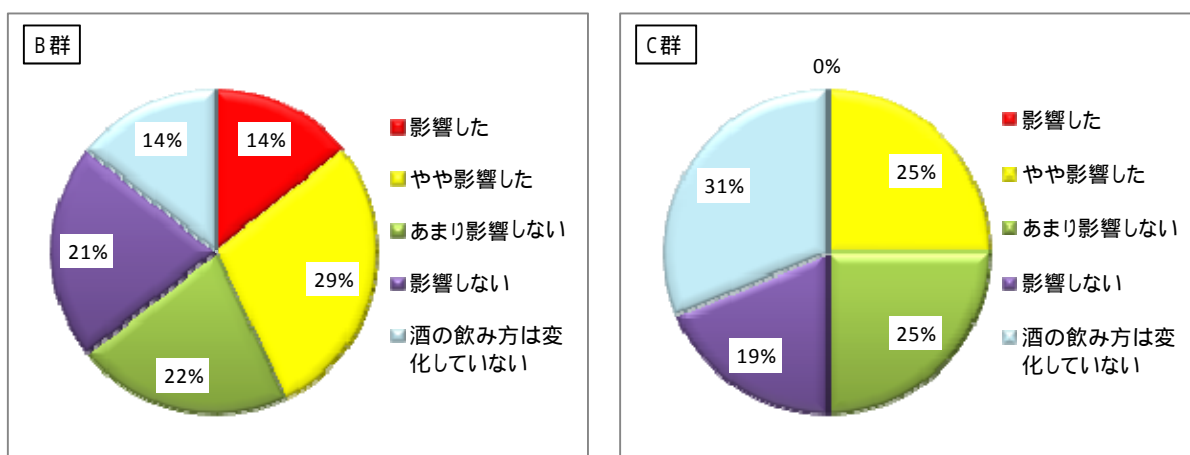


図 5.48 アルコール・インターロック装置装着によるお酒の飲み方への影響

2) Q4: 自動車の運転状況の変化に対して、装置を使用していることは影響しましたか

「影響した」「やや影響した」の合計は、B群が29%、C群が37%であり、装置の起動時間が長いため、早めに家を出るとの回答が多い。また、フリースタートを30分に設定していたことから、再測定が面倒であり、買い物や早めに切り上げたとの回答もある。

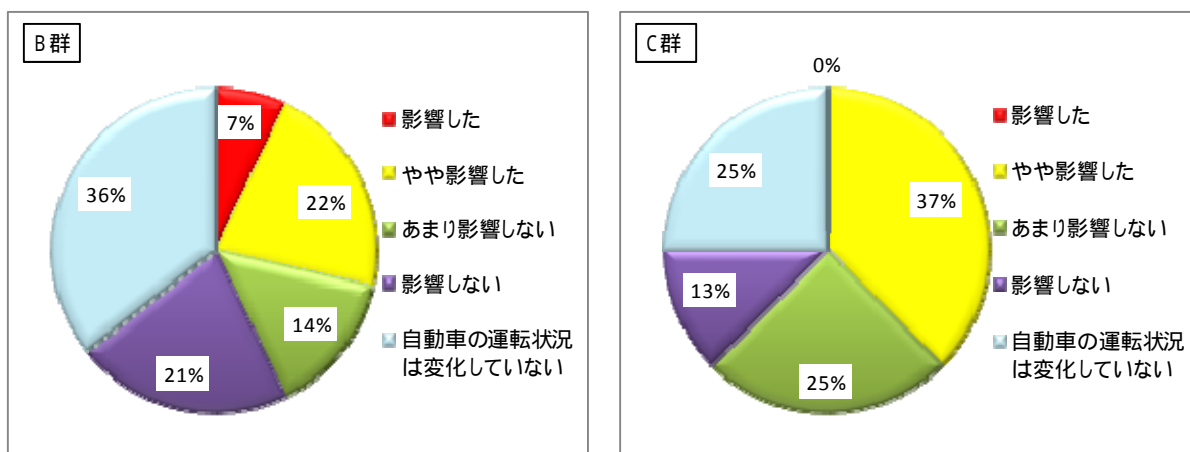


図 5.49 アルコール・インターロック装置装着の運転状況への影響

3) Q5: 装置を使用する前に比べて、使用している間、飲酒習慣は改善しましたか
 「悪化した」「やや悪化した」との回答はない。「改善した」「やや改善した」の合計は、B群が50%、C群が37%である。

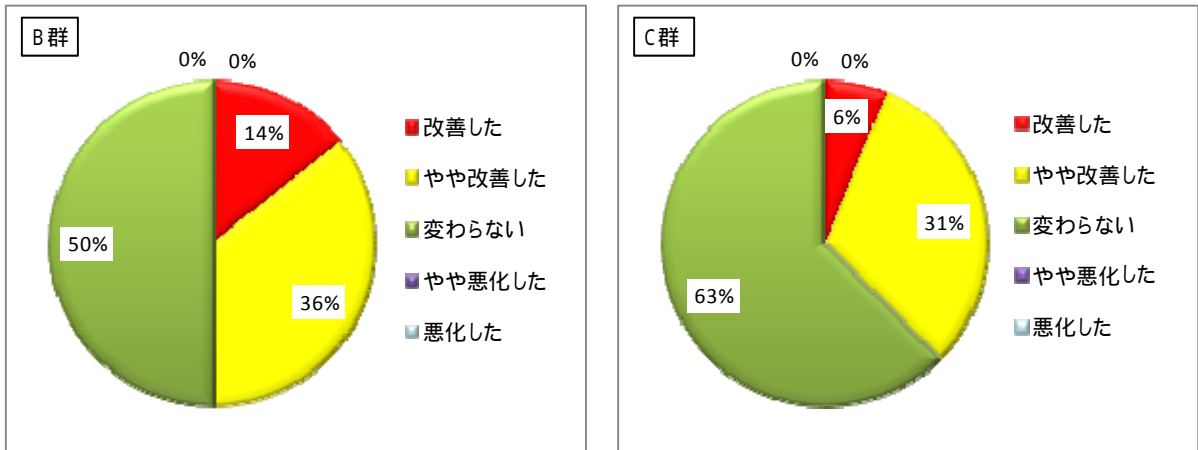


図 5.50 アルコール・インターロック装置使用中の飲酒習慣の変化

4) Q6: 飲酒習慣の改善又は悪化に対して、装置の使用は影響しましたか
 「影響した」「やや影響した」の合計は、B群が44%、C群が18%である。

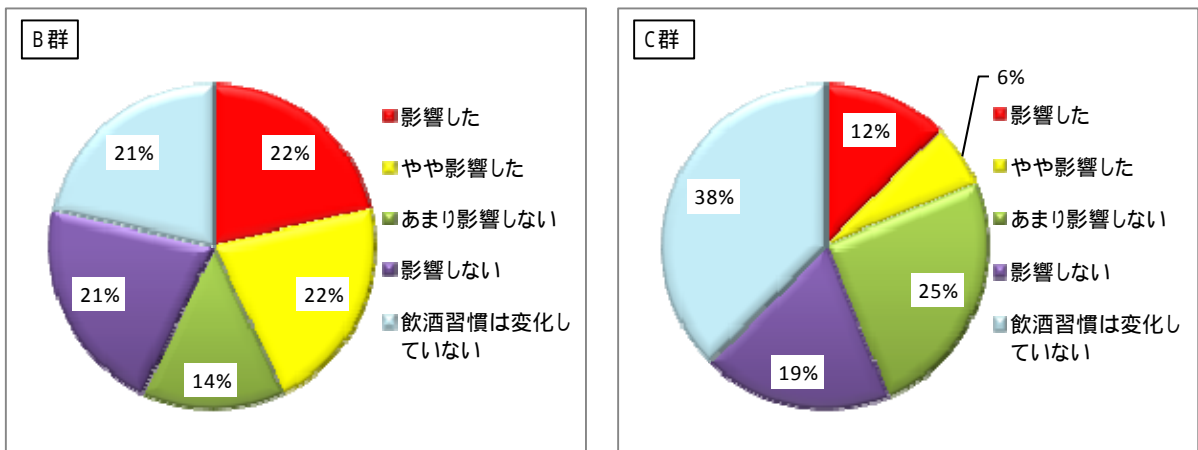


図 5.51 飲酒習慣の変化へのアルコール・インターロック装置の影響

5) Q7: この装置は飲酒運転防止に効果があると思いますか
 「思う」「やや思う」の合計は、B群が79%、C群が94%であり、アルコール・インターロック装置は飲酒運転防止に効果があるとの回答が多い。

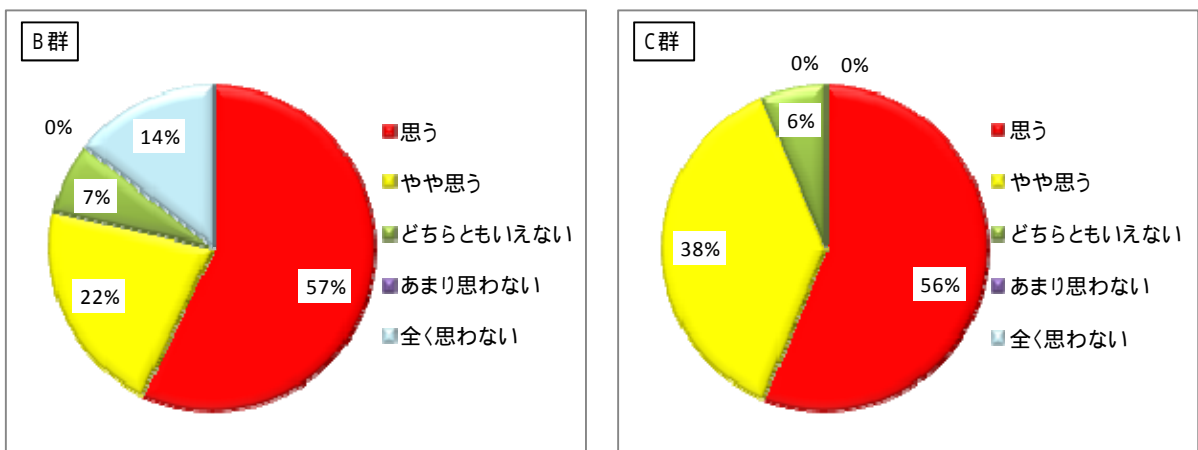


図 5.52 アルコール・インターロック装置の飲酒運転防止効果

6) Q13: バイパス・スイッチの必要性について

今回使用した装置は、機器の故障が多かったことから、90%がバイパススイッチが必要(「どちらかといえば必要」含む)と回答している。機器の信頼性が確保されても、緊急時に必要との意見もある。

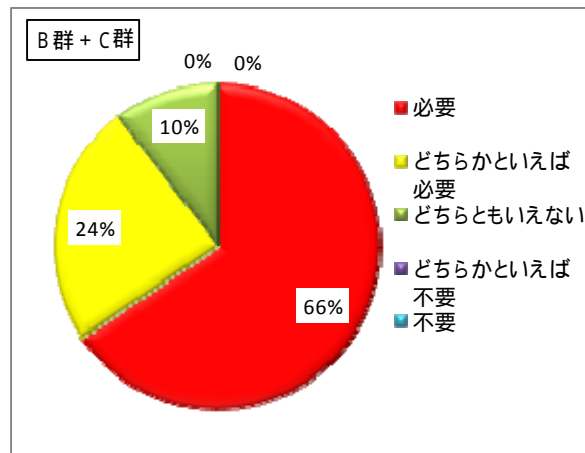


図 5.53 バイパススイッチの必要性

7) Q14: 装置の良い点、悪い点

良い点

- ・ 飲酒運転防止になる。
- ・ アルコールが残っていないという安心感がある。
- ・ 日帰りゴルフなどでは、飲酒量を考えるようになった。
- ・ 前日の飲酒量を意識した。
- ・ 飲酒運転に対する意識が高くなる。

悪い点

- ・ 煩わしい。
- ・ 誤動作や機械のトラブル。
- ・ 息の吹き込みの強弱が難しい。
- ・ 息を吐く時間が長く必要で、体調が悪い時など息が続かない時がある。
- ・ ウォーミングアップの時間が長い。
- ・ フリースタートが30分では短い。
- ・ 設置場所が邪魔。
- ・ 誰でも息を吹き込めるので、完全に飲酒運転を阻止できる装置ではない。
- ・ 装置が大きい。
- ・ バッテリーが上がる。

8) Q15: 装置の今後の使用について

今後、使用したくない者は33%であり、今後も使用したいとの回答が多い。

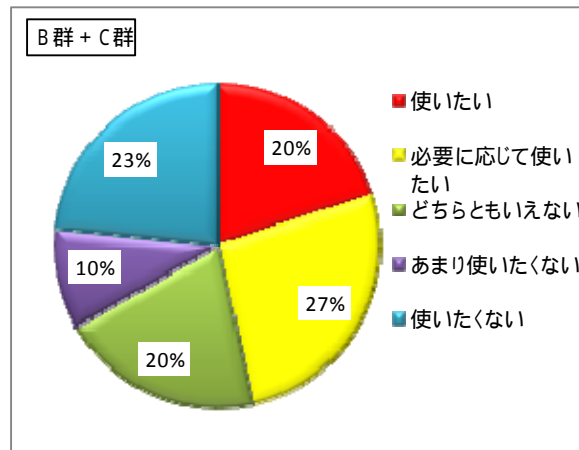


図 5.54 今後の使用について

9) Q16: 装置の購入及び取付に要する費用について

無料が17%いるが、66%が10,000円までを負担すると回答している。

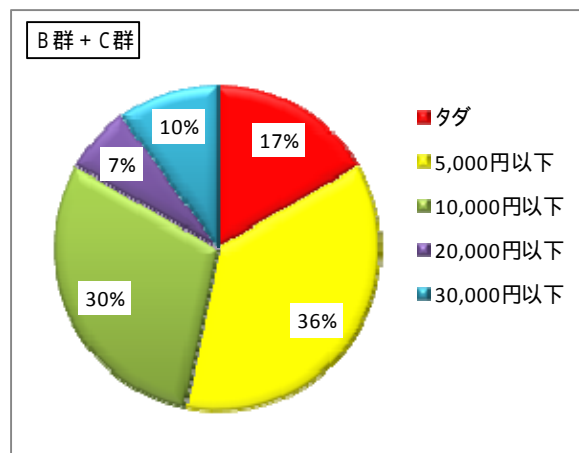


図 5.55 費用負担額

10) 装置を使用する前と比べた使用中の飲酒量の変化に対する装置の影響との関係

飲酒日、多量飲酒日が減少した者は、装置が影響したとの回答が多い。

飲酒日が減少した者への装置の影響は、C群では全員が影響したと回答しているが、B群では半数に留まり、ブリーフインターベンションの効果も伺える。

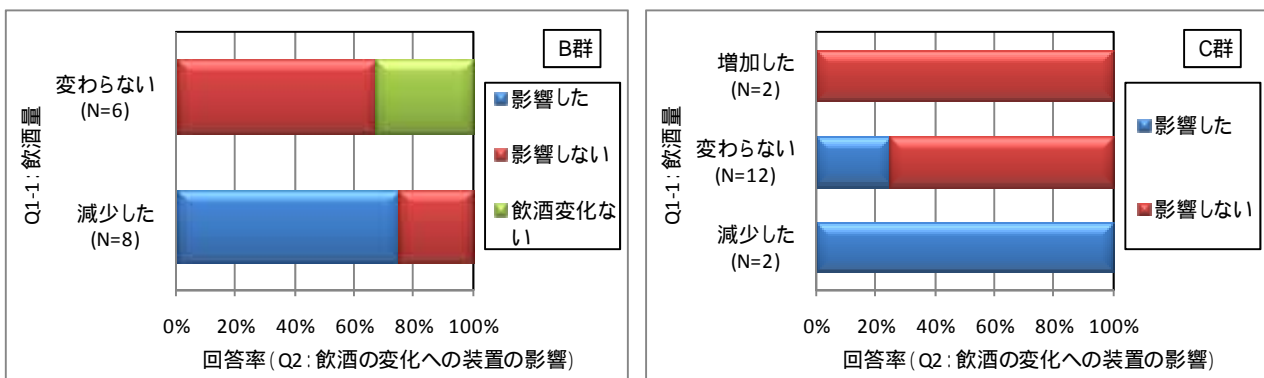


図 5.56 飲酒量と飲酒の変化に対する装置の影響の関係

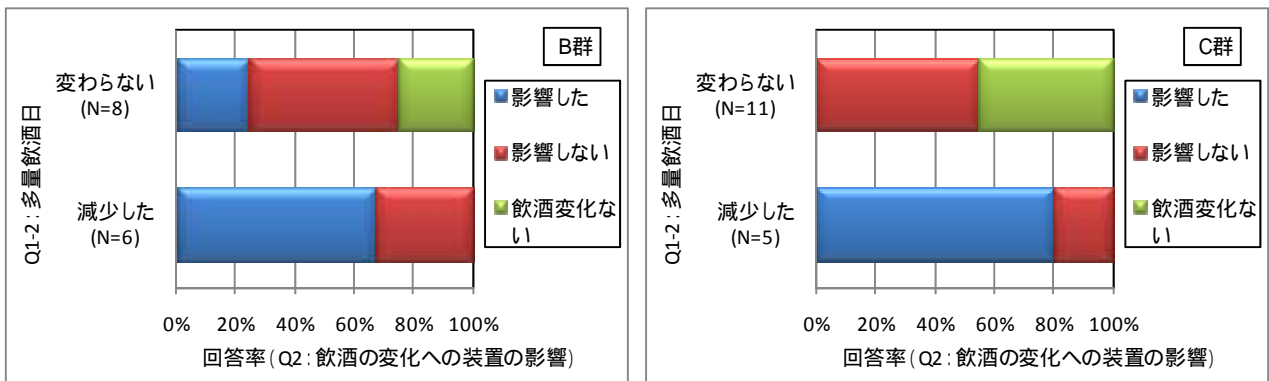


図 5.57 多量飲酒日と飲酒の変化に対する装置の影響の関係

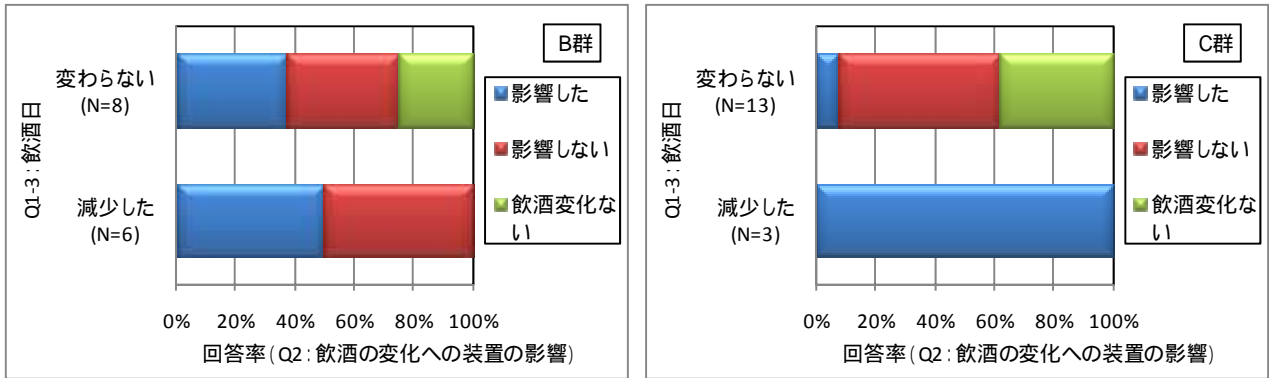


図 5.58 飲酒日と飲酒の変化に対する装置の影響の関係

1 1) 家族の装置への反応と継続使用との関係

継続使用したい者の家族は装置に肯定的であるが、継続使用したくない者の家族には肯定的回答がない。

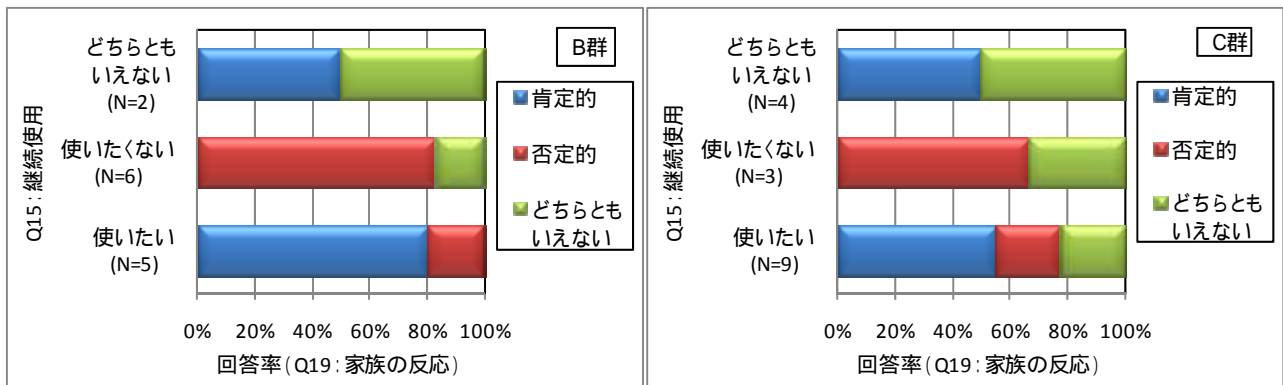


図 5.59 家族の反応と継続使用の関係

1 2) 装置の使いやすさとウォーミングアップ時間、息の吹き込みやすさとの関係

ほぼ全員が、装置が使いにくい原因として、ウォーミングアップ時間が長いと回答している。装置が使いにくいと回答した者では、息の吹き込みが煩わしいとの回答が半数以上を占める。

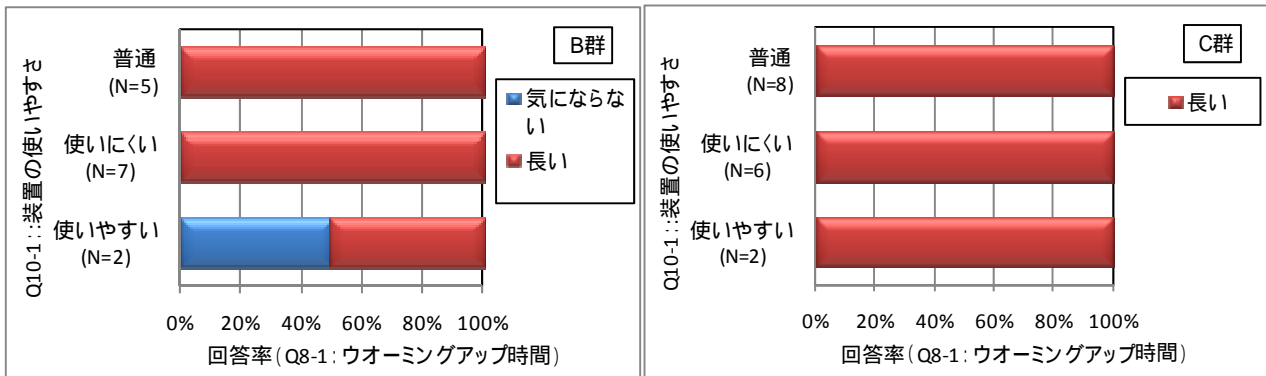


図 5.60 置の使いやすさとウォーミングアップ時間の関係

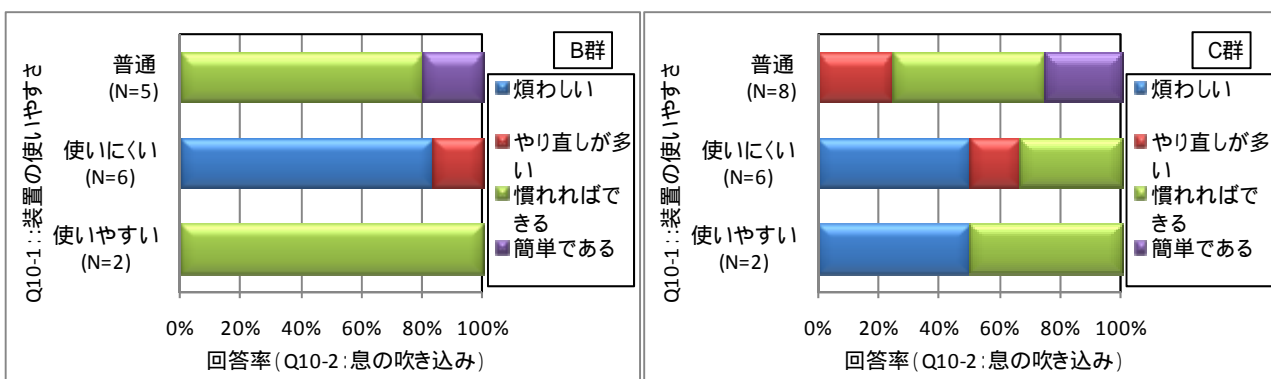


図 5.61 装置の使いやすさと息の吹き込みやすさの関係

(9) 検証実験結果のまとめ

検証実験における実施内容

本実験においては、一週間あたり一定量以上のアルコールを摂取する者であり、かつ、一週間あたり2~3回程度自動車を運転する者を対象に、ブリーフインターベンションや所有する車両へのアルコール・インターロック装置の装着等を行い、その結果生じる飲酒行動の変化について、実験開始後3ヶ月後、6ヶ月後、12ヶ月後に、飲酒量、飲酒日数、多量飲酒日数を把握することにより、その効果を測定した。なお、それぞれの効果の測定にあたり、ブリーフインターベンションおよびアルコール・インターロック装置の効果を検証するため、下記のA群、B群、C群、D群の4つの群を設定し、各群間の結果を比較した。

- ・ A群：ブリーフインターベンションを行う（51名）
- ・ B群：ブリーフインターベンションとアルコール・インターロック装置装着を行う（14名）
- ・ C群：アルコール・インターロック装置装着及びパンフレット配布を行う（16名）
- ・ D群：パンフレット配布のみ（コントロール群）（45名）

検証実験の結果

実験結果のポイント

(効用)

ブリーフインターベンションは、実施後1年以上、飲酒日数、飲酒量、多量飲酒日数を、安定して減少させる効果があった。また、多くの者に受け入れられやすいものであることが明らかとなった。

アルコール・インターロック装置については、多量飲酒日数を減少させる傾向が見られた。

(留意点)

ブリーフインターベンションを実施後の効果の持続時間には個人差がある。
アルコール・インターロック装置について、飲酒量の削減効果は一時的な効果に留まる。また、バイパススイッチの使用を管理した場合の結果である。さらに、市場に出回っている装置に信頼性が確保されていないものが含まれていることに加え、装置の使用に係る使用者の負担が大きい。
ブリーフインターベンションとアルコール・インターロック装置を併用する場合は、それぞれを単独で使用する場合と比較して特異な傾向が見られた。

1) ブリーフインターベンション (A群の結果より)

➤ 効用

(実験結果より)

- ・ブリーフインターベンション実施後1年以上、飲酒日数、飲酒量、多量飲酒日数を減少させる効果がある(実験前比、飲酒日数17%減、飲酒量43%減、多量飲酒日数50%減)。
- ・51名分のサンプルについて、介入前と比較して、飲酒日数、飲酒量、多量飲酒日数に有意差が認められる結果となっており、安定した効果が期待できる。

(アンケート結果より)

- ・ブリーフインターベンションにより、飲酒日数、飲酒量、多量飲回数を減らそうと考え、また、実際に減少させたと答えており、幅広い方の飲酒に対する意識を改善する効果が期待される。
 - ✓ 減らそうと考えた者：飲酒日数78%、飲酒量86%、多量飲酒日数89%
 - ✓ 実際に減らした者：飲酒日数73%、飲酒量88%、多量飲酒日数80%
- ・面接に要した時間について、長かったと答えた方は3%、ワークブックに問題があると答えた者は4%にすぎず、参加者に受容されやすいものであると考えられる。ただし、検証実験への参加に係る報酬が支払われることにより、参加者の受容性が高められている可能性がある。
- ・多量飲酒日数について、減らそうと考えた者と実際に減らした者の間に9%の差があり、思うように多量飲酒日数を減らせない者が存在する可能性がある。

➤ 留意点

(実験結果より)

- ・適切な運営主体により、会場及びアドバイザーが確保された上で、実施される必要がある。

(アンケート結果より)

- ・半分以上の方が1年経過後でも飲酒日数、飲酒量、多量飲酒日数が減少していると回答している一方で、約1/3の方が3ヶ月未満で元に戻ったと回答しており、大まかに、1年以上効果が継続するグループと3ヶ月未満で効果が無くなる2つのグループに分かれる可能性がある。

2) アルコール・インターロック装置 (C群の結果より)

➤ 効用

(実験結果より)

- ・多量飲酒日数について、第2回フォローアップ時点で有意に減少しており、アルコール・インターロック装置を装着することの効果が見受けられる。一方で、装置を取り外して6ヶ月経過した第3回フォローアップ時点では、有意差は認められず、介入前と比較して減少する傾向が見られる。(実験前比62%減)

(アンケート結果より)

- ・自覚のないまま飲酒運転となってしまうことを予防することが期待される。
- ・翌日に自動車の運転が予定されている場合の飲酒量の抑制効果が期待される。

➤ 留意点

(実験結果より)

- ・予算の制約により十分な数のサンプルを確保できておらず、今回の実験結果のみから確定的な結論を導き出せるわけではないことに留意することが必要。

- ・飲酒日数への影響は見受けられない。
- ・飲酒量について、装置の装着当初は抑止効果が認められるものの、装置装着中の第2回フォローアップ時点(6ヶ月後)で有意差が認められなくなり、装置を取り外した後は、実験前と同様の飲酒量となっており、飲酒量の抑止は、一時的な効果に留まる。(実験前比、第2回フォローアップ15%減、第3回フォローアップ7%増)。
- ・本実験においては、管理者によりバイパススイッチの使用が管理された条件下で実施されており、バイパススイッチの適切な管理が必要であるものと考えられる。
- ・今回実験に使用した装置については、約1/3の装置に故障、交換が必要となっており、市場に出回っている装置であっても信頼性が十分に確保されていないものが含まれている。
- ・自動車の他の装置と比較して暗電流が大きく、バッテリーが上がりやすくなる(今回の実験において3件発生)。

(アンケート結果より)

- ・装置の故障や緊急時に備え、呼気テストを経ずにエンジンの始動を可能とするバイパススイッチが必要不可欠と考えられる。
- ・他人の成りすましによるエンジン始動が可能。
- ・現状の装置では、呼気量、装置起動までの待ち時間など、使用者にかかる負荷が大きい。
- ・負担してもよいと考える額と比較して、装置が15万円から20万円と高額である(66%の者が負担しても良い金額を1万円以下と回答)。
- ・アルコール・インターロック装置の取り付け・使用に関する家族の反応について、34%の者が「否定的な反応」と回答していたが、居住地域における公共交通機関の整備状況やセカンドカーの普及の程度により、家族の反応に差がある可能性がある。(なお、今回の調査研究においては、神奈川県周辺に居住する者を対象として実験を実施。)
- ・アルコールの呼気中濃度や血中濃度に関わらず飲酒運転は禁止されているが、アルコールの呼気中濃度が設定値(今回は0.072mg/L)以下であればロックされない。なお、設定値を0mg/Lにすると頻繁に誤検知が生じることが予測され、現実的ではない。

3)アルコール・インターロック装置とブリーフインターベンションの併用について(B群の結果より)

➤ 効用

- ・「1)(A群の結果より)」の効用、及び「2)(C群の結果より)」の効用と同様の効果があると考えられる。

➤ 留意点

- ・予算の制約により十分な数のサンプルを確保できておらず、今回の実験結果のみから確定的な結論を導き出せるわけではないことに留意することが必要。
- ・飲酒量について、アルコール・インターロック装置取り外し後の第3回フォローアップ時点に、第1回及び第2回フォローアップよりも大きく減少している。同様に、飲酒量及び飲酒日数の増減比率についても、第3回フォローアップ時に減少した者の数は、第1回及び第2回フォローアップより多くなっており、特異な傾向が示されている。今回の実験の結果から、こうした傾向とアルコール・インターロック装置を取り外したこととの関連の有無を判断することは不可能であるものの、装置があることにより飲酒運転になっていないことが確認できるため飲酒の抑制が行われにくくなった可能性や、装置が無くなったことによりアルコールが残っていないことが確認できなくなり、より大きく飲酒を抑制させるようになった可能性も考えられる。